

近世期宮崎郡における取立てと「身上り」

—The contribution and the promotion in Miyazaki County in the Early Modern—

大賀 郁夫

キーワード

郷士 郷足輕 身上り 貸上銀 献納銀 ヘゲモニー主体

目次

はじめに

一 延岡藩の郷士

- (一) 有馬氏時代の郷士
- (二) 内藤氏入封時の郷士
- (三) 宮崎郡での新規取立て
- (四) 郷士の処遇

二 献納と「身上り」

- (一) 宮崎郷士の系譜
- (二) 安政改革における献納と「身上り」
- (三) 身分・格式と献納銀額

結びにかえて

近世村落には百姓身分以外に苗字・帯刀を許された郷士が存在した。本稿は日向国延岡藩領宮崎郡村々で漸次取立てられた郷士について、その取立てられた契機・処遇・勤務方等を明らかにするとともに、特に安政三年の藩財政改革において賦課された貸上銀上納に対する反対給付としての身分・格の上昇Ⅱ「身上り」状況を説明することを課題とする。

延岡藩では有馬氏時代に宮崎郡に小侍・足輕が置かれていたことが確認でき、内藤氏の入封以降、宮崎郡では治安の悪化を理由に漸次郷士・郷足輕が取立てられた。化政期以降は藩財政の窮乏にともない、献納銀上納による「身上り」が広汎にみられるようになる。安政改革で宮崎郡に賦課された改革備金は七三〇〇両であり、献納した三五〇余人には銀額に応じて身分・格、下賜物が給された。百姓から脇差御免には銀一〇〇目、郷士になるには銀一貫目以上が必要であった。郷士のなかには郡奉行の直接支配下となる「郡方支配郷士」や、さらに「組外役人列」まで昇る者もいた。彼らの多くは年貢米の廻漕に携わる商人たちであり、財力により身分・家格上昇を果たしたのである。彼らは宮崎郡地域での政治的・経済的ヘゲモニー主体層であったといえる。

はじめに

近世村落には百姓身分以外の「士」身分層、すなわち苗字帯刀を許された郷士層が存在した。郷士に関する研究は、戦前の小野武夫氏^①以来古くから数多くの研究蓄積がある。被支配身分層の家格上昇に関しては、金納取り立て郷士の実態解明や、村役人や豪農など中間層の家格意識をめぐる研究がなされてきた^②。最近では、支配身分の身分標識としての「帯刀」意義を踏まえた郷士の分析^③や、地域社会論が集団（階層）内部の問題を十分に検討してこなかったとして、百姓身分からの家格上昇運動に着目した研究など、新たな視点からのアプローチがなされている^④。

本稿では、日向延岡藩領宮崎郡を対象に、宮崎郡において郷士が取立てられた経緯や、地域における彼らの役割を明らかにするとともに、幕末期の財政改革において貸上銀上納の反対給付として大量に創出された「献納取立郷士」をはじめとする被支配層の「身上り」について、その実態を明らかにすることを課題とする。対象とする延岡藩は、日向国臼杵郡を城附とする表高七万石の譜代藩である（延享四年以降藩主は内藤氏）。領域は城附臼杵郡四三カ村・二万九二〇三石余のほか、城附西部の高千穂郷一八カ村・七二二九石余のほか、飛地として宮崎郡二一カ村・二万四六九五石余、豊後国大分郡三五カ村・一万八五石余、速見郡一六カ村・二九六石余、国東郡三三カ村・七七〇三石余^⑤から構成される分散型所領である。なお、使用する史料は特にことわ

らない限り明治大学博物館所蔵内藤家文書である。

一 延岡藩の郷士

（一）有馬氏時代の郷士

日向国延岡領は、慶長十七年十二月に領主高橋元種が改易されたのち、同十九年三月有馬直純に賜り、直純は七月に肥前国日野江から一万三〇〇〇石の加増を受け延岡城に入部した^⑥。藩領は城附臼杵郡のほか、西部の高千穂郷、宮崎郡、諸県郡、児湯郡からなるが、このうち宮崎郡は二七カ村・高一万九千九百三十八石余で全藩領の三七・六%を占め、石高では城附臼杵郡（三五・七%）を上回っている。

さて、有馬氏時代には宮崎郡に宮崎小侍と宮崎足軽の存在が確認できる。「藩中御礼式御改之事」^⑦によると、天和三年十二月に来年正月から藩主への拝謁礼式が改正されることになり、正月五日に臼杵郡小侍や高知尾（高千穂）小侍惣代とともに宮崎小侍惣代が宮崎庄屋惣代と、また御祈禱之間において高知尾足軽と宮崎足軽が拝謁している。宮崎小侍・足軽の正確な人数は明らかではないが、貞享元（一六八四）年八月に寛永期以降家中から二割借地していたものを一割返地した際に、「宮崎小侍七十人・高千穂七斗九升六合、四十六人、新畑二丁四反、二十四人」とあり、宮崎小侍が七〇人居たことがわかる^⑧。この数は、臼杵郡小侍一人、高知穂小侍三九人よりはるかに多い。なおこの場合、宮崎小侍は宮崎郡・諸県郡・児湯郡を含むと考えられる。

有馬氏は、元禄三年九月に領内で起きた山陰・坪谷村百姓の逃散事件の責を問われ、翌四年十二月に越後糸魚川へ無城格で所替えを命じられた。明けて五年四月、藩は「糸魚川御手狭ニ付、其上近年御不勝手」を理由に、侍一一人・徒士四六人以下に暇を出しているが¹³。有馬氏の転封により宮崎郡の小侍・足軽たちがどのような処遇を受けたかは不明である。新たに延岡領主となった三浦氏の所領は臼杵郡のみであり、旧有馬氏領の宮崎・諸県・児湯三郡は幕領になったこともあり、百姓身分とされたとと思われる。

(二) 内藤氏入封時の郷士

延岡藩領宮崎郡は元禄五年に幕領となり、正徳二年に牧野成央が延岡藩主となると再び延岡藩領となる。しかし寛保二年に藩主牧野貞通が京都所司代に昇進すると、宮崎郡は太田組の太田・源藤両村と大塚村の一部の計四六九三石余を残し再度幕領に編入された¹⁴。延享四年八月、牧野氏に代わって延岡藩主となった内藤氏は、幕領であった宮崎郡村々を日田代官岡田庄太夫から引渡された。その際に、太田組大庄屋に加え、幕領時代に廃されていた大島・跡江・瓜生野各組の大庄屋四人を苗字帯刀御免で復帰させるとともに、「刀御免、大庄屋格ニ被成可然者共」が附札されて藩に上申された。

牧野氏治世時代、宮崎郡には御林山守として瓜生野村二人・大瀬町村三人・細江村三人・船引村一人の計九人の郷足軽が配されていた¹⁵。彼らは持高のうち八五石分の村役を免除され、一人につき上畑一反歩余宛を給されて山守を勤めた。しかし幕領に編入さ

れた後は帯刀を禁止され、給地を返上させられて年貢を賦課されたが、持高八五石余分の村役免除は継続されて山守を勤めた。内藤氏入封に際して、引き続き幕領として残った船引・細江両村の四人以外は勝手次第となったが、残りの五人が郷足軽として引き継がれたかは不明である。

宮崎代官が詰める宮崎役所の番人は、有馬氏時代同様に郷足軽が一人宛勤めた¹⁶。牧野氏時代、宮崎郡には郷足軽が一〇人居り、地方で三石・一人扶持を給されていた。ほかに下され物として毎暮に米三俵宛、小頭には一俵増で大方三石・二人扶持相当を給されていた。勤方は役所番や郷中諸普請の世話、代官郷出の際に供人として召し連れられた。幕領時代には放免されたが、このうち二・三人は当座雇いされている。引継書では「右郷足軽、役所入用程者御抱不被成候ハ、罷成間鋪」と助言されている。実際に郷足軽として藩に召し抱えられたのは、役所番二人と納所御用・諸普請世話・代官郷出の際の供人・飛脚として四人の計六人であった。なお役所には、近領役所への使者や、延岡飛脚を勤める際に郷足軽に貸出される御貸刀二腰が常備されていることから、郷足軽は普段帯刀はしておらず、苗字も名乗らなかったようである¹⁷。

宮崎代官は、郷足軽が少給で難儀していることを憂慮し、藩に次のような口上書を差出している。

口上

宮崎御役所附郷足軽

太右衛門 平蔵

新左衛門 林七

源次郎 金平

右之者共、去十月廿五日方被召抱候ニ付、御宛行地方三石ニ
 壹人扶持宛被下候、右六人之者勤方之儀ハ宮崎御役所江壹
 人宛昼夜詰切、非番方御物成米船積之節兩人も船主召連罷出、
 其外他所飛脚又者郷中所々普請宰料并御物成銀穀御納所方催
 促ニも附置候故、非番取候儀茂不罷成程之義ニ御座候、右之
 下給分地方三石之取米代替候得ハ、此方直段ニて者漸金壹兩
 程之高ニ罷成候、ケ様ニ少給のもの御用繁相勤候ヘハ、外ニ
 田畑手作仕、暮方之足ニ仕義も不罷成、御宛行計ニ而ハ取続
 兼申候、尤牧野様御代ニハ郷足輕拾人ニ而相勤候場所、六人
 ニ而困窮仕相勤候間、壹人扶持御増被下候共、又者人数十人
 御増被成候共、御了簡被下候様ニ仕度奉存候、右申上候通諸
 御用向出精仕相勤候間、御時節柄之義ニ御座候得共、御憐愍
 ヲ以被仰付被下候様被仰上可被下候、以上

七月

津山四郎右衛門

猪狩庄右衛門

馬目長兵衛^⑩

郷足輕が地方三石・一人扶持と少給であるうえ、人数も先代牧野
 氏時代より四人減であり、その状態で宮崎役所へ一人宛昼夜詰切
 り、非番から物成米の船積み時に二人が船主を召し連れて立合い、
 他所への飛脚や郷中普請宰領および物成銀穀納所方催促も勤める
 ため、非番をとることもできないほど多忙であるとしている。給
 分である地方三石の取米値段はようやく金一兩程にしかならず、
 豊後足輕が一人扶持・三兩二分であるのに比べて「過分成違ひニ

御座候」として、給分の一人扶持増か人数を一〇人に増員するか
 を願出ている。これに対して藩は「壹人ニ付米三俵ツ、被下」と
 附札で回答している。

牧野氏治世期には在地の顔役を「小侍」に任じて地方支配の一
 助としていた例もみられる。宝暦九年九月には、苗字・帯刀御免
 で小侍であった大瀬町村の林兵衛に、改めて苗字・帯刀を許して
 「御境目守」の任に当たらせている。

一郡奉行申達候者、宮崎大瀬町村林兵衛与申者、牧野様ニ者給
 分被下小侍ニ被仰付、苗字刀御免被成御境目守相勤候由、当
 時頭立罷在候右村方之義、高鍋佐土原御領其外御料所入会之
 場所ニ付、内々ハ度々入割候義茂有之候得共、林兵衛義兼而
 人品宜慥成者ニ付、村方之者茂村役人同様ニ重シ、右之者差
 配相用申候、此度穂北逃散百姓有之節茂、御近領之事故万一
 御領分江入込候義難計候ニ付、右林兵衛義村方固申付候所、
 先年小侍相勤候者故萬端取計茂行届、他領ニ而者以前之通小
 侍与相心得罷在候付、下知茂相用申候、人品茂宜者ニ付、此
 度苗字刀御免被成御境目守被仰付候様ニ仕度旨、宮崎御代官
 申達候旨郡奉行申聞候付、各江茂逐相談候処申立之趣無相違
 茂相聞、他領入会之場所ニ候得者取之ため御代官申達之通
 苗字刀御免被成、御境目守被仰付可然与有之ニ付、江府へ申
 達御前相親候処、窺之通可申付旨被仰出候段江府より申来候
 ニ付、左之通申渡候様郡奉行江申渡

郡方江

宮崎大瀬町村

林兵衛

此者儀人品宜御用向差働相勤候趣申達茂有之ニ付、此度苗字刀御免被成、御境目守被仰付候、猶又出精相勤候様可被申渡候¹⁷⁾

ここで注意したいのは、代官から郡方に上申された案件は御用部屋で議論され可否が決定されるのであるが、苗字・帯刀御免の伺いは江戸の藩主まで上申されていることである。身分に関わることは御用部屋での詮議を経て、さらに藩主の裁定によって決定されていたことがわかる。

(三) 宮崎郡での新規取立て

延岡藩の飛地宮崎郡は延岡城下から二泊三日かかる遠方にあり、「此方領分宮崎之義、天料并所々御領内入組候場所¹⁸⁾」であり、他領への逃散事件も未遂を含め多発しており、村方騒動も頻繁に起こっている¹⁹⁾。

寛延三年には富吉・長嶺・大塚・瓜生野・大瀬町五カ村百姓が未納年貢の年賦返済と米拵え難渋等を訴え逃散を計画した宮崎騒動が起こり、翌年漸く事件は落着する。これを受ける形で寛延四年閏六月、宮崎代官から村廻役取立ての案件が延岡郡方へ上申された²⁰⁾。

覚

太田村 大塚村 源藤村
祖右衛門 治左衛門 戸佐右衛門

富吉村

藏左衛門

浮田村

甚右衛門

長嶺村

源右衛門

瓜生野村之内竹篠

大瀬町村

花ヶ嶋町

伊右衛門

武兵衛

与惣左衛門

池内村

久左衛門

ノ拾人

右之通此度宮崎郡村廻役被仰付可然奉存候、人品年格合并居住之在所共ニ得与吟味仕申達候、右之外上野町三左衛門・瓜生野村之内千代ヶ崎忠兵衛共ニ都合村廻役拾式人之高ニ罷成申候、右之通ニ而郡中御取ノり行届可申与奉存候、尤此度被仰付候拾人之者共、前格之通給分赤米式石ツ、被下、帯刀御免被成候様仕度奉存候

案件は、宮崎郡中取締りとして太田村祖右衛門以下一〇人と、上野町三左衛門および瓜生野村忠兵衛の計一二人を、給分として赤米二石、苗字・帯刀御免の処遇で村廻役に取立てたいものである。村廻役は「村々庄屋共方上」の格付けである。

これを受けた郡方は郡奉行が次のように御用部屋に上申した。

一 右三左衛門・忠兵衛儀、村方取ノりニ茂相加候間、苗字御免被下候様ニ致度旨先達而申達置候、弥御聞届被下候ハ、此度被仰付候拾人之者共茂同様之儀ニ候間、是又不残苗字御免被成候様仕度奉存候、右村廻役之儀村々庄屋共方上ニ相立萬端取計為仕候事ゆへ委細申達候、以上

閏六月

郡方²¹⁾

御用部屋で家老たちが論議した結果、郡奉行の上申通りに聞届

けられた。彼らは実際に、同年夏に起きた長峯村百姓たちによる薩摩藩領穆佐への逃散事件解決に奔走した褒美として、苗字御免とされている。²²⁾

村廻役の役目について具体的にみてみよう。次の史料は村廻役設置から四年後の宝暦四年八月に、郡方から御用部屋へ上申されたものである。

覚

一宮崎村々四年以前未年騒動後、為取ノ村廻役拾貳人御立被成、
 壹人ニ付赤米式石宛被下、村々変儀茂有之節者早速宮崎御代
 官江申達、平日萬端心付、猥成義無之様被仰付、一ヶ月壹度
 宛壹人切ニ書付を以村方之趣申達候様申付、仲伴共書付順番
 ニ預リ延岡表江罷出、於地方役所私共右書付開封仕見届、猶
 又罷出候村廻江直ニ所々相尋候所、段々静謐ニ罷成、度々延
 岡迄罷出候義路用者相渡候而茂、其身共物入茂相掛り迷惑之
 趣茂相聞付、二三ヶ月廻リニ罷出候様去年申付、今以右之通
 罷出承届申候、弥村方静謐ニ罷成候付何ぞ相変候書付ニ茂無
 御座、別条無之趣一通之書付差出申候、右ニ付以来者右村廻
 共差出候書付、封印之俣ニ而月々宮崎御役所江差出置、幸便
 を以御代官方差遣、若又直ニ罷出相達度御用筋有之節者其段
 御代官江申達、不時ニ茂罷出候様申付可然与奉存候、右之段
 御代官江茂内談仕候処、右之通被仰付候而茂差障有御座間鋪
 旨申聞候、月次ニ罷出候度之路用相渡候義茂御費ニ御座候ニ
 付、右之趣申達候、以上

八月

郡方²³⁾

四年前に取り立てられた村廻役二人は、村方で異変がある場合は直ちに代官に通報するなど治安維持を最重要任務とし、ひと月に一度宛一人が村の様子を記した書付を延岡まで持参していた。地方役所で郡方役人がそれを開封して内容を確認し、村廻役に直接問い合わせることもあった。しかし村方はすでに静謐になっており、毎月延岡まで出向くには出費もかかるため、一・三カ月ごとに外向くよう昨年命じた。村方はいよいよ静謐になっており、今後は村廻役が差し出した書付を封印したまま毎月宮崎役所へ提出させ、幸便で代官が延岡へ送るようにした。なお、直ちに延岡へ報告する要件がある場合はその旨代官へ申し出て、いつでも出立できるようにしている。

（四）郷士の処遇

他領・幕領と境を接する宮崎郡では、大庄屋以下庄屋・年寄ら村役人と、郷士・郷足輕などの「士分」の者たちが、宮崎代官のもとで実質的な郡運営を行っていた。近領での出入りや火災・難船があった際には、大庄屋が村人を引き連れて出役したが、その際大庄屋に桃燈合印が許されたのは宝暦十二年になってからである。

覚

太田組大庄屋
 猪八重善左衛門
 瓜生野組大庄屋
 後藤善右衛門

跡江組大庄屋

椎 諸兵衛

大嶋組大庄屋

川越友右衛門

右之者共兼而御奉公向大切ニ差入、村方出入等茂成丈ケ内々ニ而相済、御他領引合等之節茂尚又出精仕、上之御苦勞ニ茂不相成候様取扱、御奉公向差入候者ニ御座候、右ニ付候而者桃燈合印之儀御他領近村出火難船其外重立候而、御他領出合等之節ハ御免被下候様仕度奉存候、出火等之節者大勢召連罷越候へ者、大庄屋ニ誤り御座候様仕度奉存候、去暮利銀等御断之儀ニ付候而も別段出精仕候者ニ御座候間、合印御免之儀御聞届被下候様仕度奉存候、以上

七月 宮崎御代官²⁴

宮崎代官からの上申を受けた郡方では、豊後領でも先年大庄屋に合印を許したこともあり、郡奉行が御用部屋へ上申して認められている。

在方での精勤がみとめられ、大庄屋が郷士に取立てられる場合があった。

一 瓜生野村大庄屋後藤六郎左衛門儀、紙座綿座掛り合出精差入相勤候ニ付、此度郡方支配江御入郷士格被仰付、依之大庄屋勤御免被成、御扶持方式人扶持被下置、只今迄之被下米五俵被御据置、尤外大庄屋共年若ニ付重立候御用之節者万端米添為致可然候²⁵

瓜生野組で大庄屋を勤める後藤六郎左衛門は、専売制を進める藩の紙座・綿座掛合を勤めた功により、郡方支配郷士格に取立てられ、二人扶持を給された。郷士格となったことにより六郎左衛門は大庄屋勤を免じられたが、大庄屋給米五俵は据え置かれている。なお後任には、六郎左衛門の倅で大庄屋見習いの清八が給米五俵で就任している。

また文化二年八月には、跡江組大庄屋椎喜藤治と上別府村庄屋島原津之助が、「数年出精郡中御用向等各別差働候」との理由で郷士に取立てられた。喜藤治の跡大庄屋には倅文太が、津之助の跡庄屋には同じく倅伊勢太が任じられている。²⁶喜藤治と津之助が郷士となったことで宮崎郡の郷士は六人となった。次の史料は宮崎郡郷士の格式について記したものである。

宮崎郡郷士六人之内、太田蔵兵衛・日高惣太郎・岩切助次郎右三人者郡奉行支配之郷士ニ付、年始御礼ニ茂年々出岡仕、御礼申上候部御座候、椎喜藤治・島原津之助兩人者一ト通之郷士、後藤忠蔵儀者郷士格ニ付、年始御礼者宮崎表ニ而申上相済申候、然ル処此度就御入部御目見出岡之儀如何可仕哉、年始御礼とも違ひ、御入部御目見之儀ニ御座候間、喜藤治・津之助・忠蔵儀も出岡被仰付可然哉相同申候、尤何レも自分入用ニ而罷出候先形ニ御座候、以上

六月 郡方²⁷

宮崎郡郷士六人のうち、先に郷士に取立てられた太田蔵兵衛・日高惣太郎・岩切助次郎の三人は郡奉行支配の郷士であるため、年始御礼は毎年延岡まで出頭するが、新たに郷士に取立てられた椎

喜藤治と島原津之助両名は「一ト通」の郷士、また後藤忠蔵は郷士格であるため、年始御礼は宮崎役所で済ませていたとする。この度の藩主入部に際しての拝謁について、喜藤治・津之助・忠蔵らも出岡するよう命じてはどうかという上申内容である。藩は旅費自費でこれを認めている。同じ郷士でも、郡奉行支配と「一ト通」では格式に差があったことがわかる。

寛延四年に取立てられた一二人の村廻役は、村方が静謐化したこともあり漸次廃止された。ところが一九世紀に入ると村方の治安は急速に悪化する。それに対処するために藩は村廻役を増員して再置する。

当郡之儀御領・私領入相之場所から故歟、人氣六ヶ敷我俣勝成所ニ而、内証入割等度々之儀御座候得共、大駄之儀者取喫内済致置申候、別而若キもの共ハ心得違多、自然与不人品成者共茂出来、盗人沙汰之絶間茂無之様相聞、其上唐物抜荷出口之場所柄故油断罷成不申候、飢肥領清武辺ハ下役人多廻り等茂無油断相聞、薩摩領ハ尚以之儀村々廻り之もの多相聞候、御当領之儀格別見廻として去ル亥年より郷組式人充御廻シ被成候得とも、是者町場重ニ而郡中一統江者行届不申候、先年者村廻り八人御立被成、壹人江赤米五俵宛被下置、苗字刀御免被成、村々無絶間相廻候処、御改ニ而追々御止、当時椎熊次郎壹人村横目与被仰付御立被置候、然ル所五六年以前方村足輕御立被成、御用之節者苗字刀御免、出扶持壹升宛被下置候所、平日勤方無之寔ニ不時御用之節被召仕、当時此もの式拾八人有之候、右之もの共平日共苗字刀御免被成、郡中村々

代々相廻候様被仰付候ハ、各別御取締相附、御近領江之御響キニも宜可有御座候、定日相廻候節者出扶持ニも及不申候、乍去御威光無御座候而ハ罷成不申候間、前段之通苗字刀御免被成、五人組合之儀者村横目椎熊次郎同様相除キ、寺・庄屋・横目・村足輕・年寄与申順ニ為仕可然奉存候、外ニ御物入茂無御座御取締も相附候間、右申達之通被御聞届候様仕度奉存候、尤病身等ニ而廻り難渋之者ハ願之上御免被成、是迄之通り不時御用之節計苗字刀御免被成、五人組等茂村方組合江御戻シ被成候様仕度奉存候、以上

五月

宮崎役所²⁸

藩は亥（享和三）年から宮崎役所の郷組を二人宛廻村させていたが、町場が主であり広大な郡中には行き届かなかった。先年は村廻役を八人増員し、一人に赤米五俵と苗字帯刀御免の待遇で廻村させたものの再度廃止され、当時は椎熊次郎一人が村横目として残るだけであった。五、六年以前から村足輕二八人を取立て、御用勤時には苗字帯刀御免で出扶持米（日当）一升宛を給していたが、あくまで緊急時のみの臨時雇いであった。そこでこの村足輕を平日も苗字帯刀御免として郡中村々を廻村させれば治安も安定し、近領の評判も良くなるとしている。但し威光がなければならぬため、苗字刀御免としたうえで村横目椎熊次郎同様に百姓五人組から除き、村方では寺・庄屋・横目の次、年寄の上座に位置づけられた。もっとも病身などで廻村できなくなれば御役御免となり、従来通り臨時の時だけ苗字帯刀御免で、村方五人組に戻された。

文政十二年九月、宮崎郡下北方村の倉右衛門ら二〇人が「農業間之節ハ棒心掛奇特之事ニ付、御用向之節者刀相用候義御免被成置候処、無怠致出精候趣申達之筋茂有之候²⁹⁾」を理由に郷足輕に取立てられ、平日苗字帯刀御免と出扶持米一升宛を給された（なお倉右衛門は川崎常右衛門と改名している³⁰⁾。倉右衛門たちが農閑期に棒術訓練に励み、「身上り」の機会を伺っていたことは想像に難くない。

また「村々為取締」として郷足輕五〇人の取立てが上申されている。

覚

宮崎郡郷足輕五拾人

右者当郡之儀、前々方悪敷仕癖にて聊之事を茂大造ニ申立、兎角大勢集候事多御座候処、其度毎敵敷致吟味候而者罪当者之絶間無御座、表向御糺と相成候而者上之御苦勞ハ不及申、約村方困窮之基上下之不為ニ付、可相成は事之引纏不申内内済相片付候様取計来申候処、右集相談等之儀其村役人江不為申聞候得者、如何様之意味も不相訳事多、取扱相掛候ニも差支候儀間々有之、第一郷組少而御手薄ニも御座候ニ付、郷足輕御取立平日刀御免被成下候ハ、自然打寄等之節村方之模様も相知、万一之儀有之節右之者共諸役ニ召仕候ハ、急度御用立郡中御取立ニも可相成奉存候間、御用相勤候節者日別米壹升宛被下置候様、去々丑之春百人申達之内五拾人被仰付、其後次第ニ御取締相付候得共、大村四五人、小村式三人位ツ、之当無御座候得者差支之儀間々御座候間、相残五拾人此度申

達之通被御聞届候様仕度奉存候、以上

卯四月

宮崎役所³¹⁾

これは宮崎役所勤の郷組が少数で騒動解決に即応できないため、その補完として郷足輕五〇人を取立てておけば万一の時に役立つというもので、丑（文政十二年春に一〇〇人の増員を上申し、このうち五〇人が取立てられていた。大村では四、五人、小村でも二、三人宛配置しなければ差支えるとして、残りの五〇人の増員を願出するが、藩は「追而御沙汰可有之候」とのみ答えるだけで、沙汰止みとなっている。郷士たちは平日苗字刀御免であったが、御用を勤める時だけ日別米一升が給されるのみであり、名誉重視の待遇であった。なお、下北方村郷足輕の野中代蔵のように、「御用立候人品御座候」として郷組に召し抱えられ、宛介と給地三石一人扶持・糶三俵を給される者もあった³²⁾。

藩権力の末端として御用を勤める郷士たちは、村方においてはどのような存在であったのだろうか。宝暦四年八月、中村町の藤兵衛と上野町の源右衛門が「御用向万端差働出精」「町中取扱等宜敷」「内々ニ而相済候儀多相聞エ申候³³⁾」を理由に、勤中苗字御免となっている。中村町と上野町は大淀川を挟む町場であり、特に中村町は旅人が大勢入組む場所で、年中入割が多数発生していたが、藤兵衛は手慣れたもので多くを内済した功績が認められたのである。また文化二年閏八月には、江平町郷士太田蔵兵衛以下「郡中御用向各別ニ差働」に対して藩から褒美を賜っている。

一 江平町郷士太田蔵兵衛義、兼々郡中御用向各別ニ差働、他所引合同并唐物拔荷取締方等無手抜心掛骨折、其上古城村一件

ニ付而者別段差働候筋有之候付、只今迄被下来候御扶持方代銀渡之処、此度正米渡ニ御直被成下可然候

一 柏原村郷士岩切助次郎儀、富吉村一件ニ付而者右村江度々罷越、別段骨折差働候ニ付、各別之筋を以此度御紋附麻下一具被下之可然候

一 上別府村郷士島原津之助義、兼々郡中御用向各別出精、他所引合同并唐物拔荷取締方無手抜心掛、其上古城村・富吉村一件取扱行届各別骨折差働候付、此度郡方支配江御入被成、且亦右ニ付而者内外物入も有之趣相聞候付、銀五拾目御手当被成下可然候

一 跡江村郷士椎喜藤治儀、富吉村一件ニ付而者最初方取嚙彼是骨折差働候付、此度郡方支配江御入被成可然候

一 小松村庄屋長峯重次郎儀兼々御用向出精、其上富吉村一件取嚙精々いたし、春以来同村江相詰各別骨折差働候ニ付、以来他所引合同并御用之節者、桃燈合印御免被成可然候

一 江平町郷士太田蔵兵衛義、他所引合同并唐物拔荷取方掛合ニ付而者無手抜、御料所年寄之ものへ懇意ニいたし、内証応而物入も有之趣ニ付、銀三拾目御手当被成下可然候

一 大嶋村弥太右衛門・治之助儀、御植物初発より定夫ニ罷出候処差入宜、櫛□方等功者罷成、其上面々持畑江楮苗仕立献納いたし、各別出精差働候ニ付、此度帯刀御免被成、御植物懸合被仰付、出扶持壺升も被下置可然候³⁵

郷士たちは「古城村一件」「富吉村一件」などの村方騒動を未然に阻止したり、唐物拔荷取締方役を勤めた褒美として、扶持方で

代銀渡しを正米渡しとされたり、紋附麻袴や銀拝領・桃燈合印御免・帯刀御免などの処遇を受けている。

二 献納と「身上り」

（一）宮崎郷士の系譜

宮崎代官が郷足輕や郷士の増員を上申する場合に、「前々方悪敷仕辭にて聊之事を茂大造ニ申立、兎角大勢集候事多御座候³⁶」などと、常套句のように言い募った宮崎郡の治安の悪さは、少々誇張はあるが、少なくとも藩はそのようにみていたことは確かである。そのため藩は、平日苗字帯刀を許されるが御用勤時に限り日別米一升を給するだけの郷足輕を八人、二〇人、五〇人と増員させていく。

当初、郷足輕や郷士への取立てや苗字帯刀御免などの「身上り」は、「御用立候人品」「人品宜敷萬端指働」というように、「御用向」において「上之御苦勞ニも不相成」よう取り計らう能力のある者が対象であった。こうした「身上り」条件に変化がみられるようになったのは、一九世紀に入った文化期以降である。貸上銀上納者に対する反対給付としての特権・身分を得ることによる「身上り」である。藩による領内への貸上銀賦課は、入封直後の寛延期以降間断なく行われていたが、藩財政窮乏の深刻化とともに化政期以降通常化し、賦課額も高額になっていく。³⁶

例えば文化九年閏八月には、下北方村百姓甚六・生目村同清兵衛・伊平次の三人が、藩主入部につき銀三〇〇目を寸志献納した

ことに對して、帶刀御免の村（郷）足輕に取立て、御用向を勤める際には苗字を名乗ることを許されている。^{③7} 文政六年七月、藩は領内村々に「段々御入用ニ御差支」を理由に高役金を賦課した。宮崎郡浮田村の場合、高一〇石につき銀二五匁五分三厘宛で二貫八〇二匁、天保三年五月にも同理由で一〇石につき二五匁三分宛で二貫七九匁、また同十三年には「日光參詣ニ付」一〇石につき二五匁五分宛で二貫七九匁に上っている。^{③8} こうした藩からの高役金や賃上銀賦課を契機に、個人として献納することによって「身上り」がみられることになる。いくつか事例をみてみよう。

① 太田家の系譜

第1表は太田家の由緒をまとめたものである。^{③9} まず太田家では、寛政三年五月に同姓藏兵衛久満が親藏兵衛が病死した跡を受けて、祖父代からの「苗字刀御免、給地三石三人扶持、桃燈合印御免年頭御礼」を相続し、八月には郡方支配郷士となっている。この身分・格式は祖父代に「台所御用向各別差働」、すなわち献銀を契機に漸次獲得してきたものである。久満は寛政五年二月、紙座仕入れ不時借上と、去夏調達銀献納により一人扶持加増、同十二年にも献納により給地四石一人扶持を加増された。その後も繰り返し献銀するとともに唐物抜荷吟味隠密掛合や、町村の出入りに対する骨折など御用向に出精し、病死する前年の文政元年六月には郡方支配郷士・給地一九石八人扶持にまでなっている。

久満の跡は、文政二年九月に養子辰三郎が相続する（但し給地一五石・八人扶持・米一〇俵）が、辰三郎は文化十三年十一月に養父の調達銀・所持馬献納により郡方支配郷士・給地四石を給さ

れていた。辰三郎は藏兵衛忠敬と改名し、文政四年に調達銀・無尽掛米献納により四人扶持を加増されたのを皮切りに、同六年十二月御内用向出精・御用調達銀献納により四人扶持加増、翌七年には江戸常用金仕送出金により粉五俵を加増されている。その一方で、同十一年瓜生野村騒動、天保四年江平町入作勘定出入、同六年瓜生野村出入、同八年幕領細江村百姓騒動などに対して骨折・内済している。文化十四年十一月に中村町で起こった大火事に際しては、藏兵衛ほか岩切助次郎・後藤忠藏・大山貞吉たち名士一〇人が、焼け出された被災者に銀穀や醬油・塩その他諸品を支援したとして、宮崎役所で吸物・肴三種・酒を給されている。^{④0} また天保四年三月には村難洪者へ上納向取替えや夫食の配布、翌五年十二月には去冬以来穀類払底につき下直で払米して極困窮者へ米錢などを助成するといった社会奉仕活動にも出精するなど、地方名望家としての社会的地位を築き上げていった。嘉永六年十月、養子勝三郎への跡相続時には、知行一一〇石・給地二石・米六〇俵・粉一〇俵と、中級家中士と遜色のない給分であった。

② 日高家の系譜

次に日高家についてみてみよう（第2表参照）。^{④1} 日高家は寛政四年十一月に弥太郎重勝が、親太助の「御内用向差働」により給地一石を拝領したことに始まる。同七年には調達銀献納により苗字御免となっている。享和二年、重勝の病死にともない倅重清が、給地一石・苗字帶刀御免の家格を相続する。文化期以降、重清は調達銀献納を繰り返し、文化十二年に別当格、翌十三年大庄屋格、文政六年には郡方支配郷士に昇格する。天保十年には太田組大庄

近世期宮崎郡における取立てと「身上り」（大賀郁夫）

第1表 太田家由緒

●太田蔵兵衛久満		
寛政3	1791	5-2親蔵兵衛病死、祖父代より台所御用向各別差働に付苗字・刀御免・給地3石3人扶持、桃燈合印・年頭御礼 8-5郡方支配郷土
寛政5	1793	2-25紙座仕入不時借上・去夏調達銀により1人扶持加増（3石4人扶持）
寛政12	1800	1-7先般献納銀願出により給地4石1人扶持加増（7石5人扶持）
享和1	1801	2-15今般献納銀・楮苗差上により紋付麻袴拝領 10-2中村町不正一件骨折により給地3石加増（10石5人扶持）
享和2	1802	12-23当春以来内用向骨折により以来米5俵宛年々被下置
文化1	1804	7-1御用調達銀上納により給地4石加増（14石5人扶持） 8-15他所引合内外取扱骨折により紋付帷子被下置、他所引合筋掛合拜命
文化2	1805	5-10唐物抜荷吟味隠密掛合拜命 8-9郡中御用向出精・古城村一件骨折により銀30目、扶持方代銀渡を以来正米渡へ
文化3	1806	2-20御内用向差働・御馬献上により掛物1幅・盃1被下置
文化4	1807	7-20太田蔵之助倅辰三郎を養子
文化6	1809	5-13御内用向差働により1人扶持加増（14石6人扶持）
文化7	1810	10-28御内用向出精により紋付小袖1拝領
文化10	1813	2-23御内用向出精・借入銀高献納により給地2石加増（16石6人扶持）10-21水論一件骨折により被下米5俵加増（10俵宛）
文化12	1815	6-14御内用向出精・借入口入等差働により2人扶持加増（16石8人扶持）
文化13	1816	11-15御内用向出精・御用調達銀献納・所持馬献上により紋付縮緬小袖1被下置、倅辰三郎を郷土・給地4石被下置（郡方支配入）
文政1	1818	6-10御内用向出精・他所借入銀返済方差働により給地3石加増（19石8人扶持）
文政2	1819	9-1病死
●太田蔵兵衛忠敬		
文化13	1816	11-15親への手当を以郷土・給地4石・郡方支配入
文政2	1819	9-1祖父代より御内用向出精により給地15石・8人扶持・米10俵相続、郡方支配郷土
文政4	1821	7-4調達銀・無尽掛米献納により4人扶持加増（15石12人扶持）
文政5	1822	3-23御内用向出精・物成米払出精により紋付麻袴拝領 10-23火事羽織合印・旅服立附着用御免 11-14献納米により宮崎役所にて5菜料理被下置
文政6	1823	12-23御内用向出精・御用調達銀差働により4人扶持加増（15石16人扶持）
文政7	1824	11-5江戸常用金仕送年々出金により被下粉5俵加増（15俵宛）
文政11	1828	5-23瓜生野村騒動取扱骨折により給地2石加増（21石16人扶持）
天保2	1831	5-8宮崎役所大門・通口屋根瓦葺仕直・表囲石塀直により苗字・刀子孫永々御免 12-23御用調達銀により4人扶持加増（20人扶持）
天保4	1833	3-23江平町入作勘定出入内済骨折、村難渋者へ上納向取替・夫食配布により紋付麻袴拝領 9-12口入貸上銀返済方出精により紋付小袖1被下置
天保5	1834	3-25貸上銀献納により今迄被下置20人扶持を新地100石に直、軍役加藤又左衛門組にて勤、給地21石・被下米15俵据置 12-23去冬以来穀類払底に付下直に払米、極困窮者へ米銭等助成により紋付小袖1被下置
天保6	1835	1-7作初穂米献納により紋付盃1被下置 9-8御内用向出精・村々諸出入取扱・瓜生野村出入誠精内済により被下米15俵加増（30俵宛）
天保7	1836	6-28去年中貸上銀献納により被下米5俵加増（45俵）
天保8	1837	8-6御料細江村百姓騒動に骨折のため5菜御料理被下置 9-10江戸下金出金差働のため紋付小袖1拝領
天保9	1838	2-1御内用向出精・去年貸上銀誠精により組外役人列加筆、本厶方町方支配組外役人列
天保11	1840	3-19内輪へ献納金により紋付帷子1拝領 5-28春中献納金・種子島渡来鉄砲献上により10石加増（110石）11-24当夏他所借入銀誠精・当春宮崎郡検見願下により紋付小袖
天保13	1842	6-6太田辰三郎倅丑之助を養子願（6-13間届）9-1去冬中貸上銀献納により被下米15俵加増（60俵）
天保14	1843	8-23御内用向出精・貸上金誠精銀主取扱骨折により紋付帷子1拝領
弘化2	1845	7-15御内用向出精・去年中貸上銀献納により粉10俵在勤中被下置
弘化4	1847	5-23養子丑之助病身につき離縁願（6-7間届）
嘉永2	1849	2-16改革につき宮崎郡中への備金献納により紋付羽織1拝領
嘉永5	1852	11-25太田辰三郎二男勝三郎養子願（間届）
嘉永6	1853	10-26病身につき養子勝三郎へ竈相続願（間届）、知行110石・給地21石・被下米60俵・粉10俵差止、5人扶持・苗字刀御免
●太田勝三郎久家		
嘉永6	1853	10-26親蔵兵衛より家督相続（知行110石・給地21石・郡方支配組外役人末席御目見之部・祖父代より拝領の紋服引続着用御免、軍役節は穂鷹長門組にて勤）
安政1	1854	10-19親蔵兵衛病死、被下米5人扶持差止
文久3	1863	3-3二年割貸上銀献納により藤模様附三ツ組盃台共被下置

（註）「田延岡藩士族家祿証明願並同減禄ノ儀証明願」（内藤家文書 第二部 11 家中 231）より。

第2表 日高家由緒

●日高弥太助重勝 初勝次郎		
寛政4	1792	11-1親弥太助御内用向差働により給地1石被下置
寛政7	1795	11-23調達銀各別差働により 苗字御免
享和2	1802	病死
●日高弥太助重清 初富太郎		
享和2	1802	11-26親弥太助病死につき給地1石引続被下置、苗字刀御免
文化10	1813	2-23御内用向差働・去年中地所借入銀献納により給地1石加増（2石）
文化12	1815	6-14御内用向差働・去年中地所借入銀口入により給地5斗加増（2石5斗）・部当格
文化13	1816	11-15御内用向出精・調達銀献納により給地5斗加増（3石）・大庄屋格
文政1	1818	6-10御内用向出精・他所借入銀返弁方出精により給地5斗加増（3石5斗）
文政4	1821	7-4御内用向差働・去冬中調達銀献納により給地1石5斗加増（5石）
文政6	1823	12-23御内用向出精・御用調達銀差働により郡方支配郷土
天保4	1833	9-16口入上銀返済方誠精により紋付麻袴1具拝領
天保5	1834	3-19貸上銀献納により被下米4俵加増（9俵宛）
天保7	1836	6-28去年中口入貸上銀献納により被下米4俵加増（13俵）
天保10	1839	4-18去年中貸上銀献納により被下米5俵加増（18俵）11-27太田組大庄屋後見、在勤中米3俵宛
天保11	1840	年々被下置
天保12	1841	11-13清次郎名代御用立により御内用掛合・苗字刀御免
天保13	1842	11-15銀談として本庄枳屋六郎次方へ対談骨折により褒美銀として銀15匁拝領
弘化2	1845	9-1去冬中貸上銀献納により被下米20俵加増（38俵）
嘉永2	1849	7-19去年中貸上銀献納により4人扶持被下置
嘉永4	1851	2-19改革につき宮崎郡中への備金献納により8人扶持加増（12人扶持）組外役人末席・御目見之部
		6-15病身のため清次郎へ竈相続願（聞届）、12人扶持・給地5石・米38俵差止、清次郎へ10人扶持・給地5石・米20俵宛、郡方支配郷土、弥太助拝領紋服着用御免、弥太助へは2人扶持被下置
●日高清次郎		
嘉永4	1851	6-15親弥太助より竈相続、10人扶持・給地5石・米20俵宛、郡方支配郷土、親拝領の紋服着用御免
安政1	1854	3-1売向金錢取引実意・延岡廻米の濡米運賃米に繰替出精により組外役人末席御目見
安政2	1855	12-3御内用向出精・当夏借入金再借対談向骨折により錫盃銚子1被下置
安政4	1857	12-29日田郡代通行時骨折により褒美銀6匁被下置
万延1	1860	10-8改革につき宮崎郡中への備金献納により組外役人列へ加入、筆順本メ方町方支配組外役人
文久2	1862	列者打込
文久3	1863	12-清次郎を清四郎と改名願（聞届）
		8-3御内用向出精・備米貸上請仕により藤模様付盃1台共被下置
元治1	1864	3-3郡中二ヶ年割貸上銀株立者取扱出精・即日献納により米16俵加増（36俵）6-9渡海船所持し
慶応1	1865	大坂登米・廻米積受別段米取扱入念により紋付盃1台共拝領
		11-13去夏借上米20俵・去暮米2000俵再借・去暮より買上米誠精により紋付帷子拝領
		10-11両替備金差配各別誠精により米7俵加増（43俵）

(註)「旧延岡藩士族家禄証明願並同減禄ノ儀証明願」(内藤家文書 第二部 11 家中 231) より。

屋後見を勤め、翌十一年には伴清次郎が御内用掛合・苗字帯刀御免となっている。嘉永二年には改革備金献納により組外役人末席・御目見部となり、士分末席に連なった。嘉永四年六月には病身のため隠居し、伴清次郎は「給地五石・一〇人扶持・米二〇俵、郡方支配郷土」を相続し、親拝領の紋服着用を許された。清次郎は安政期以降藩への献納を繰り返し、後述する藩の安政改革における改革備金として銀一六貫目（『諸品控日記帳』）を献納したことにより、組外役人列に加えられ、筆順は本々方・町方・支配組外役人列者打込とされた。また文久三年六月には家業の廻漕業による大坂登米・廻米積受が「別段米取扱入念」ということで紋付盃を拝領している。元治元年には去暮米二〇〇〇俵を再借するなど、「買上米誠精」により紋付帷子を拝領した。慶応元年にも「両替 備金差配各別誠精」により米七俵を増増され、給地五石・一〇人扶持・米四三俵となっている。清次郎の場合、給地増より米の増や紋付盃・帷子・錫銚子などの拝領物が多いのが特徴である。

太田・日高両家のように、彼らは藩への献金という手段で「身上り」、藩政改革や産物統制などに深く関わってその地位を保持・発展させた。また同時に、被災者や難渋者に対して米・諸品を配布するなど社会奉仕活動にも熱心であり、地域社会の名望家としての役割を担ったのである。

（二）安政改革における献納と「身上り」

藩による領内への貸上銀賦課と、その反対給付としての取立て

「身上り」について、ここでは延岡藩で実施した安政改革⁽⁴²⁾とありあげてその実相をみてみたい。

延岡藩の財政は、延享四年の延岡入封以降、旧領陸奥国岩城平領より内高二万石余の減少に加え、約三万四〇〇〇両余に上る転封費用により窮乏化する。藩の年間総収入約四万両前後に対して藩債は宝暦九年に三万三千八百両余、明和三年には一〇万五千六百両余と一〇万両を突破し、安政二年時には江戸借財四二万両、大坂二六万三〇〇〇両、延岡一〇万三〇〇〇両の合計七十八万六〇〇〇両に達していた⁽⁴³⁾。改革の直接的契機は、安政元年に家中扶持米を売り払って江戸廻金するまでになり、翌年には扶持米は借金担保としての借入能力を無くし、江戸廻金の目的が立たなくなってしまうことにある⁽⁴⁴⁾。

安政三年二月、藩は借財整理を中心とする仕法を発表した。その内容は、改革備金四万両を領内から調達し、藩の総収入三万九〇〇〇両のうち三万両ですべてを賄い、残り九〇〇〇両を借財返済にあてるというものであった。この仕法が成立するためには、総支出が三万両で収まること、改革備金四万両が予定通りに調達できること、そして借財先への返済金が九〇〇〇両で済むこと、この三点が絶対条件であり、このうち一つでも不成功な場合は仕法自体が成り立たない。藩は返済据え置きの嘆願をすることで一時的な返済猶予を期待したに過ぎないのであり、藩債自体の返済・整理を計画したものはなかった。実際には上野諸寺院などの公宮金への返済猶予嘆願と、小田家など城下町商人に対する返済拒否が藩の基本方針であった⁽⁴⁵⁾。

仕法の三柱のひとつである四万両の改革備金調達はどうであったのだろうか。調達計画は、船手方以下各役所から八一〇〇両、城附および高千穂・宮崎郡・豊後三郡の「株立候者」から三万一九〇〇両を調達するといふものであった。備金は「株立候者」すなわち金主たちと村々小前たちに賦課され、城附で四六二〇人、豊後三郡五一〇人、宮崎郡五四一人（ほかに出家・社人一三人）、高千穂三一七八人の計八八四九人に上った。⁽¹⁶⁾このうち宮崎郡に賦課された七三〇〇両は、安政三年から五年までの三年間で調達する計画であったが、初年に調達すべき二七三〇両余に対して春に調達できたのは八六一両余（約三一・六％）すぎない。⁽¹⁷⁾

同年十月、用人松田多膳と下郡鈴木卯之丞が宮崎役所へ出役し、小前百姓たちに直接御用調銀を命じた。太田組村々では後藤忠蔵が銀二一貫目（金三〇〇両）、日高清次郎が同一六貫目（二二八両余）、岩切忠兵衛と松本佐兵衛が一二貫目宛など合わせて八人の金主から七八貫五〇〇目、また太田組内二町四村から四九貫九九〇目の計一二八貫四九〇目（一八三五両余）を三力年で上納するよう命じられている。⁽¹⁸⁾

翌安政四年九月、藩は貸上銀献納に応じた三五九人（但し、各村の大庄屋・庄屋など献納銀を上納せずに身分・格式・下賜物を給された者もいる）に対して、格式・身分・献納額に見合った反対給付を行った。その内容は、新たに身分・格を得た「身上り」と盃・帷子などの下賜物拝領、それに新切加増の三つに大別できる。宮崎郡村々の貸上銀献納者は総数三五八人に上り、一部を除

いて村別に記載されている。⁽¹⁹⁾以下、それぞれ具体的にみていこう。まず「組外役人末席」と「郡方支配郷土」の計一人が、村ごととは別に記載されており、彼らが藩にとって特別な存在であったことがわかる（第3表参照）。「組外役人末席」・「御目見之部」である日高清次郎（献納銀一六貫目）・同日高弥吉（同四貫目）両人は「組外役人列」・「本ノ方町方組外役人列」に、「郡方支配郷土」である岩切忠兵衛（一二貫目）・松本佐兵衛（同）は「組外役人末席」・「御目見之部」・「郷方並引方」に、日高久兵衛（六貫目）・中原清兵衛（同）には紋附盃（台共）・腰張馬御免、太田直三郎（五貫五〇〇目）・服部幸助（同）には錫銚子・腰張馬御免、黒木長次兵衛（二貫目）は紋附帷子と伴卯三郎に苗字・帯刀が許された。岩切丹治（五〇〇目）は紋附麻袴、猪俣勝之助（無）には紋附小袖・腰張馬御免が下賜されている。彼らは以前から藩へ貸上銀献納を繰り返しており、安政期までに身分・格式を得ていたであり、この度の献納によりさらなる「身上り」・下賜物拝領となったのである。

第4表から残り三四七人の内訳をみると、新たな身分・格となった一七五人と、身分・格に加えて新切加増が二三人、同じく下賜物拝領七人の計二〇五人、五九・一％が「身上り」したことになる。第5表は組・村別に「身上り」状況を示したものである。なお、大庄屋や庄屋・町部など、各組・村・町場で献納銀上納に尽力したとして、献納銀なしで身分・格式・下賜物を拝領した三〇人は除く。

文化年間に「郡方支配郷土」三人と「一ト通」郷土二人、郷土

第3表 組外役人末席～郡方支配郷士の献納取立表1

献納者名	給地 (石)	扶持 (俵)	被米 (俵)	新切 (石)	既得身分・格	既得下賜物	献納額 (匁)	新身分・格	下賜物
日高清次郎	5.0	10	20		組外役人末席 御目見部	錫銚子・紋附麻袴・紋附小袖 紋附帷子・親被下物着用御免	16匁000	組外役人列 本ノ方町方組外役人列	
日高弥吉	8.0		10		組外役人末席 御目見部	紋附小袖・紋附帷子 祖父代被下物着用御免	4匁000	組外役人列 本ノ方町方組外役人列	
岩切忠兵衛		5	18		郡方支配郷士	藤模綾附三ツ組盃台共 錫銚子	12匁000	組外役人末席 御目見部・郷方並引方	
松本佐兵衛		10	35		郡方支配郷士	紋附小袖・紋附龍紋袴 紋附帷子・親被下物着用御免	12匁000	組外役人末席 御目見部・郷方並引方	
日高久兵衛	3.0	5		2.0	郡方支配郷士	紋附帷子・藤模綾附三ツ組盃台共 錫銚子	6匁000		紋附盃台共 腰張馬御免
中原清兵衛	4.0	4	8		郡方支配郷士	藤模綾附盃台共	6匁000		紋附盃台共・腰張馬御免
太田直三郎	5.0		12		郡方支配郷士	紋附麻袴・藤模綾附盃台共	5匁500		錫銚子・腰張馬御免
服部幸助	1.0		6		郡方支配郷士	藤模綾盃	5匁500		錫銚子・腰張馬御免
黒木長次兵衛	2.5		11	5.0	郡方支配郷士 軍中村横目兼帯		2匁000	伴列三郎に苗字帯刀御免	紋附帷子
岩切丹治	12.0	4	3		郡方支配郷士	藤模綾附盃・紋附帷子 親被下物着用御免	500		紋附麻袴
猪俣勝之助			5		郡方支配郷士 村横目兼帯 内用掛合	藤模綾附盃台共・紋附帷子 紋附麻袴	—		紋附小袖 腰張馬御免

(註) 安政四年九月十九日「萬寛書」(内藤家文書) より作成。

第4表 宮崎郡村々献納者に対する身分・格・下賜物の割合

	身分・格		身分・格 +新切増	身分・格 +下賜物	下賜物	下賜物 +増新切	新切増	不明	合計
	人数 (%)	175 (50.4)	23 (6.6)	7 (2.0)	88 (25.4)	19 (5.5)	34 (9.8)	1 (0.3)	347 (100.0)
合計 (%)	205 (59.1)								

(註) 安政四年九月十九日「萬寛書」(内藤家文書) より。単位は上段＝人、下段％。

第5表 安政4年村別新旧身分・格一覽

[illegible]

単位は人。各組・村の大庄屋、庄屋 部当で納納銀がなくとも身分・格式や下賜物が与えられた者たち 30 人を除く。

格一人であったのが、今回の献納によって「組外役人列」二人、「組外役人末席」二人、「郡方支配郷土」は九人に新たに八人が加わり計一七人、郷土格から郷土へ四人、大庄屋格と郷足輕・郷土格から郷土へ各一人宛の合計二七人が郷土身分となった。また郷土格へは大庄屋格から八人、苗字御免・庄屋格から一人の計九人が「身上り」したことになる。郷土・郷土格となった者は献納者全

体の一七・六％に上る。

一方百姓身分から脇差御免以上の「身上り」を遂げた者は七一人、全体の三四・八％に上る。その内訳は、脇差御免となった者が四一人、脇差・袴着用御免が一六人、苗字御免九人、苗字・刀御免三人、郡中村横目格二人であった。また以前に脇差御免以上であった者たちのなかで多かったのは、苗字御免から刀御免が

第6表 大庄屋・庄屋・部当の賦納取立表2

組	役 職	氏 名	給地 (石)	扶持 (俵)	被米 (俵)	新切 (石)	旧身分・格	既得下賜物	新身分・格	下賜物	備 考
大島組	上北方村庄屋	湯地台次郎	1.0				郷土格	紋附麻袴	大庄屋格	藤段棧附忒	
	村角村庄屋	長友武之助	1.0						苗字御免		長友武之助作
	村角村庄屋見習	仲太							村人別除		
	大島組大庄屋	長友忠左衛門	4.0		10		郷土 川原町部当心添	紋附麻袴 鋤銚子	郡方支配郷土		
	上別府村庄屋後見	島原津之助	1.0		9		郡方支配郷土 南方村庄屋後見	紋附麻袴・鋤銚子・藤段棧附忒		米3俵加増	
	南方村庄屋	和田藤之助	1.0					紋附麻袴		藤段棧附忒	
	池内村庄屋	島原龍次郎								藤段棧附忒	
	花ヶ島町部当	高妻慶彦					大庄屋格・桃燈合印御免	紋附麻袴		藤段棧附忒	
	上野町部当	日高武右衛門					苗字	紋附麻袴	大庄屋格		
	江平町年寄	福島勘右衛門					苗字		部当格		
太田組	江平町年寄	庄兵衛							苗字御免		
	太田組大庄屋	猪八重亨藏			5		郡方支配郷土	紋附麻袴・鋤銚子		米3俵加増	
	大塚村庄屋	勇右衛門							苗字御免		
	古域村庄屋	押川常太						紋附麻袴		藤段棧附忒	
	中村町部当	岩切文兵衛					郷土	紋附麻袴・桃燈合印		藤段棧附忒	
跡江組	中村町部当見習	理四郎							苗字御免		岩切文兵衛作
	中村町部当格	仁田脇六郎			3				刀御免		仁田脇儀三郎作
	跡江組大庄屋	松浦市郎	3.0		5		役所内用掛合	紋附麻袴・紋附帷子 藤段棧附忒・紋附小袖・鋤銚子		米3俵加増	
	跡江組大庄屋見習	松浦弥三郎			2			紋附麻袴		藤段棧附忒	松浦市郎作
	生目村庄屋	富永三千次						紋附麻袴		藤段棧附忒	
跡江組	柏原村庄屋	岩切寛之助					大庄屋格	紋附麻袴		藤段棧附忒	
	柏原村庄屋見習	助治								雙美銀10匁	岩切寛之助作か
	小松村庄屋	長峯米治						紋附麻袴		藤段棧附忒	
	長嶺村庄屋	末富幸太郎								藤段棧附忒	
	浮田村庄屋心添	湯地栄四郎			3		郡方支配郷土 生目村庄屋後見	紋附麻袴 太田組詰中米5俵		米3俵加増	湯地栄四郎作
瓜生野組	浮田村庄屋	湯地栄藏								藤段棧附忒	
	瓜生野組大庄屋	清水平治			8		郡方支配郷土	紋附帷子・鋤銚子 紋附小袖	大庄屋格	米3俵加増	
	大瀬町村庄屋	小川栄右衛門						紋附麻袴		雙美銀10匁	小川栄右衛門作か
	大瀬町村庄屋見習	吉藏								雙美銀80目	
組	柏田町部当	太田辰三郎	5.5	4	24		郡方支配郷土	紋附麻袴・紋附帷子 紋附小袖・紋附忒			

(註) 安政四年九月十九日「寛寛書」(内藤家文書)より作成。

第7表 安政4年村別身分・格別下賜物一覽

[illegible]

(註) 安政四年九月十九日「萬葉書」より作成。上北方村には名田村・南方村、長峯村には細江村、古成村には源藤村、上野町には江平町を含む。小計・合計は計算上の数字。単位は人。各組・村の大庄屋、庄屋、部当で献納額がなくても身分・格式や下賜物が与えられた者たち 30 人を除く。

二〇人、脇差・袴御免から苗字御免、および脇差御免から袴着用御免がそれぞれ一四人、郡中村横目から大庄屋格が一三人、苗字・刀御免から郡中村横目格が八人などであった。

大庄屋や庄屋・部当たりの「身上り」や下賜物についてみてみよう（第6表参照）。彼らは藩が賦課する貸上銀上納を組内・村内に斡旋する役を実質的に担った。例えば上別府村庄屋後見の島原津之助は、安政二年十月に「当年度々御借入金ニ付而者銀主取扱等各別骨折差働候^{⑤0}」として、次男津平治を庄屋格とされている。

また跡江組大庄屋松浦市郎と瓜生野組同清水平治も、「当年度々御借入金ニ付而者銀主取扱、并去冬方再借対談向等彼是各別骨折差働候^{⑤1}」として紋附小袖を拝領している。

三〇人のうち大庄屋では、大島組の長友忠左衛門が村人別から除かれて郡方支配郷土となったほかは、太田組の猪八重亭蔵・跡江組の松浦市郎・瓜生野組の清水平治が米三俵の加増となっている。庄屋では上別府村の湯地台次郎・上野町部当日高武右衛門・大瀬町村の小川栄右衛門の三人が大庄屋格のほかは、庄屋・部当

第8表 下賜物と身分・格

下賜物	人数	身分・格
米3俵	5	郡方支配郷土のみ
褒美銀	2	郡方支配郷土・庄屋見習
紋附帷子	3	郷土のみ
紋附帷子+新切	1	〃
紋附小袖	1	郷土のみ
紋附麻袴	9	大庄屋格以上
紋附麻袴+新切	7	〃
錫銚子	6	苗字御免・庄屋格以上
錫銚子+新切	1	〃
藤模様附盃	67	苗字御免以上
新切	57	
合 計	159	

（註）安政四年九月十九日「萬覚書」（内藤家文書）より作成。

第9表 各村献納額・1人当献納額

組名	村名	献納者 (人)	献納銀額 (匁)	1人当銀額 (匁)
大島組	下北方村	21	4.810	0.229
	名田村	2	0.300	0.150
	上北方村	5	3.360	0.672
	村角村	9	6.600	0.733
	大島村	13	4.050	0.312
	上別府村	11	3.800	0.345
	南方村	1	0.350	0.350
	池内村	18	6.580	0.366
	花ヶ嶋町	11	4.550	0.414
	上野町	5	3.550	0.710
	江平町	4	5.160	1.290
	小計	100	43.110	0.431
太田組	太田村	17	4.450	0.262
	大塚村	20	6.300	0.315
	源藤村	7	1.400	0.200
	古城村	11	4.790	0.435
	中村町	12	19.850	1.654
	福嶋町	14	10.900	0.779
	小計	81	47.690	0.589
跡江組	跡江村	12	7.260	0.605
	生目村	12	4.680	0.390
	柏原村	12	4.650	0.388
	小松村	13	4.450	0.342
	長峯村	11	4.100	0.373
	浮田村	18	4.330	0.241
	富吉村	19	6.630	0.349
	細江村	1	0.100	0.100
	小計	98	36.200	0.369
瓜生野組	瓜生野村	16	9.990	0.624
	大瀬町村	12	5.500	0.458
	柏田町	5	7.400	1.480
	小計	33	22.890	0.694
合 計		312	149.890	0.480

（註）安政四年九月十九日「萬覚書」（内藤家文書）より作成。
但し、組外役人列・組外役人末席・郡方支配郷土及び献銀無い者は除く。

見習や苗字の無かった者たちが苗字御免となった以外は、藤模様附盃がほとんどであった。いずれにしても彼らが中心となって献納銀取立てに奔走していたのである。

次に下賜物拝領状況をみてみよう（第8表参照）。献納銀に対する藩からの下賜品は、米・褒美銀のほか紋附帷子・紋附小袖・紋附麻袴・錫銚子・藤模様（内藤家紋）附盃と新切であった。これらを見ると、米三俵は郡方支配郷土のみ五人、褒美銀は銀三〇目が郡方支配郷土一人と同一〇匁が庄屋見習一人、その他では紋附帷子（新切含む）が四人（郷土のみ）、紋附小袖一人（同）、紋附麻袴（同）一人（大庄屋格以上）、錫銚子（同）七人（苗字御免・庄屋格以上）、藤模様附盃六七人（苗字御免以上）など、拝領物と身分・格が明確に分けられていたことがわかる。

第9表は各組・村別の献納者数と献納銀額および一人当りの献納銀額を示したものである。史料上確認できる献納者数は三十二人、献納総額は一四九貫八九〇目、一人平均銀四八〇目である。このうち町場で商家の多い中村町・福嶋町の献納銀額が多く、一人平均銀額も大島組江平町が一貫二九〇目、太田組中村町一貫六五四匁、瓜生野組柏田町一貫四八〇目と平均銀額の二倍以上となっている。宮崎郡ではこうした在郷町の発展が、地域経済を支えていたのである。

（三）身分・格式と献納銀額

身分・格式と献納銀額の相関関係について具体的にみてみよう。第10表は身分・格式別の献納銀額についてまとめたも

第10表 身分・格と献納額

旧身分・格	新身分・格	下賜物	新切	献納銀額	備考
組外役人末席	組外役人列			4.000～16.000	
郡方支配郷土	組外役人末席			12.000	
	—	藤模様紋附盃・腰張馬		6.000	
	—	錫銚子・腰張馬		5.500	
	—	紋附帷子		2.000	忝苗字帯刀
	—	紋附麻袴		0.500	
郷土	郡方支配郷土	紋附小袖		5.500	
	郡方支配郷土		5.00	5.000	忝庄屋格
	郡方支配郷土	紋附帷子		4.000	
	郡方支配郷土	錫銚子		3.500	
	郡方支配郷土			2.600	
	桃燈合印御免		5.00	2.000	
	桃燈合印御免		3.00	1.500	
	桃燈合印御免		2.00	1.400～1.500	
	桃燈合印御免			1.000～1.500	
	—	藤模様附盃		0.400～2.000	
	—	紋附帷子		1.100	
	—	紋附麻袴	1.00	0.600	
	—	紋附麻袴		0.500	
郷土格	郷土			1.000～1.100	
	桃燈合印御免		2.00	1.500	
	—	紋附麻袴	2.00	0.900	
	—	紋附麻袴	1.00	0.600～0.700	
	—	紋附麻袴		0.400～0.700	
	—	藤模様附盃		0.150～0.400	
	—		0.50	0.100	
郷土格・郷足軽	郷土		1.00	1.400	
	—	紋附麻袴	1.00	0.600	
	—	紋附麻袴		0.500	

近世期宮崎郡における取立てと「身上り」（大賀郁夫）

郷足輕	—	藤模様附盃		0.180~0.200	
郡中村横目格	—		0.50	0.100	
郷足輕・庄屋格	—	藤模様附盃		0.160~0.200	
郷足輕郷組取扱	—	藤模様附盃		0.150~0.250	
郷足輕・苗字	—	藤模様附盃		0.150	
	—	藤模様附盃		0.150~0.200	
郷足輕	—		1.00	0.200	
	—		0.50	0.100	
大庄屋格	郷士		5.00	3.000	
	郷士格		2.00	1.500	
	郷士格		1.00	1.200~1.300	
	郷士格			1.000~1.100	
	—	紋附麻袴	1.00	0.700	
	—	紋附麻袴		0.400~0.700	
	—	錫銚子	0.50	0.400	
	—	錫銚子		0.300	
	—	藤模様附盃		0.180~0.400	
郡中村横目格			0.50	0.100~0.150	
	大庄屋格		2.00	0.900	
	大庄屋格		1.50	0.800	
	大庄屋格	藤模様附盃		0.600~0.900	
	大庄屋格			0.400~0.500	
	—	藤模様附盃		0.350~0.360	
	—	錫銚子		0.300	
庄屋格・苗字			0.50	0.150	
	郷士格		5.00	2.500	
	郡中村横目格			0.450~0.700	
	—	錫銚子		0.300~0.320	
	—	藤模様附盃		0.150~0.250	
	—		1.00	0.200	
部当格・苗字	—		0.50	0.100~0.150	
庄屋格	—	藤模様附盃		0.180	
	—	藤模様附盃		0.200	
苗字御免 刀御免	—		0.50	0.100	
	大庄屋格		1.00	1.200	
	郡中村横目格			0.500~0.800	
	部当格			0.400	
	庄屋格			0.300	
	—		1.00	0.200~0.250	
	—	藤模様附盃		0.150~0.180	
苗字御免	—		0.50	0.100~0.120	
	部当格			0.450~0.600	
	郡中村横目格			0.500	
	刀御免		0.50	0.300~0.350	
	刀御免			0.200~0.250	
	—	藤模様附盃		0.150~0.180	
刀御免	—		0.50	0.100~0.120	
	大庄屋格		1.00	1.400	
脇指 袴着用御免	—		0.50	0.100	
	苗字刀御免			0.300~0.500	
	苗字御免			0.100~0.200	
脇差	—		0.50	0.100	
	苗字御免			0.150~0.250	
百姓	袴着用御免			0.100	
	郡中村横目格		0.10	1.000~1.300	
	部当格			0.800	
	苗字刀御免			0.500~0.750	
	苗字御免			0.200~0.450	
	脇差・袴御免			0.200~0.250	
	脇差御免			0.100~0.170	

（註）安政四年九月十九日「萬覚書」（内藤家文書）より作成。単位は新切＝畝、献納額は貫匁。

のである。今度の貸上銀賦課に応じて献納した者が藩から身分・格式、新切地、下賜物などを給される最低銀額は銀一〇〇目である。

百姓が「身上り」の第一歩となる「脇差御免」となるには、銀一〇〇目を献納する必要があった。同じく銀二〇〇目〜二五〇目では「脇差・袴御免」、五〇〇目では「苗字・刀御免」、一貫目以上では「郡中村横目格」となった。「脇差・袴着用御免」以上の者が銀一〇〇目を献納した場合は、いずれも新切地五畝歩が給されている。

下位の者が飛び越えて身分・格式を獲得するにはそれ相応の銀額が必要であった。「刀御免」から「大庄屋格」には銀一貫四〇〇目、「苗字刀御免」から「大庄屋格」は一貫二〇〇目、「庄屋格・苗字」から「郷士格」が二貫五〇〇目、「郡中村横目格」から「大庄屋格」は四〇〇〜九〇〇目、「大庄屋格」から「郷士格」一貫目〜一貫五〇〇目、「郷士」三貫目、「郷士格」から「郷士」一貫目〜一貫四〇〇目、「郷士」から「郡方支配郷士」へは二貫六〇〇目〜五貫五〇〇目、「郡方支配郷士」から「組外役人末席」へは一二貫目が必要であった。従来の身分・格式に加えて、藩からの献銀賦課にいかに応え、下賜物を給されていたかも、銀額を大きく左右したと考えられる。例えば五人扶持・被下米三俵・新切二畝、紋附麻袴・桃燈合印御免であった村角村郷士の後藤勝五郎は、献納銀額二貫六〇〇目で郡方支配郷士になっているが、被下米七俵・新切地五畝歩、下賜物無しの江平町郷士大平清左衛門は銀四貫目を献納している。

献納者がいかにして大金を稼ぎ、藩への献納を可能にできたのかという経営状況については今後の課題であるが、例えば知行一二〇石・給地一四石・新切三畝歩を給された福岡町の後藤忠蔵は七〇〇石積船宝栄丸を有し、また一六貫目を献納した日高清次郎も福岡町で六五〇石積船富吉丸を有してそれぞれ廻漕業に従事しており、年貢米の廻漕などを通して藩権力と深く関わっていたと考えられる。

結びにかえて

以上、延岡藩領宮崎郡の郷土について、その取立てられた契機・処遇・勤務方等を明らかにするとともに、安政三年の延岡藩財政改革における改革備金調達状況を中心に、献納と「身上り」について検討してきた。今までに明らかになったことをまとめ、結ぶにかえたい。

延岡藩の郷土（小侍・足軽）は有馬氏時代から確認でき、貞享期には宮崎小侍七〇人を数えた。三浦氏時代には宮崎郡が幕領となったため廃されたようであるが、牧野氏時代には御林守として一〇人の郷足軽が置かれ、役所番や郷中普請の世話、代官の郷出時の供人等を勤めた。内藤氏時代には宮崎郡村々が遠方の飛地であり、他領・幕領と領境を接していたため村方騒動や逃散事件などが頻発した。そのため入封間もない寛延期には、改めて一二人を郡中取締りとして村廻役に取立てた。村方静謐を理由に村廻役は漸次廃されるが、一九世紀に入ると村方の治安が急速に悪化し、

それに対処するために藩は郷足輕を二〇人、五〇人と増員せざるを得なくなる。

こうした郡中取締りという治安面での郷土取立てと並んで、藩財政の窮乏にともない、領内貸上銀賦課への反対給付による身分格の「身上り」が頻繁になる。特に化政期以降は、貸上銀賦課に対して返済を放棄して献納し、銀額に応じて「身上り」する者が続出する。

安政三年、藩債が八〇万両に達し江戸廻金が不能となったため、藩は安政改革を断行する。その改革備金を領内から四万両を調達する計画を立て、後藤忠蔵や日高清次郎など宮崎郡の富裕商人のほかに、村々の村役人以下百姓に至るまで、宮崎郡では五四一人・七三〇〇両が賦課された。藩は献納者にその銀額に応じて身分・格や下賜物、新切等を給した。その結果、「組外役人列」二人、「組外役人末席」二人、「郡方支配郷土」一七人など、郷土が二七人、郷土格が九人に激増した。下賜物では紋附帷子・同麻袴・同小袖のほか、藤模様附盃が多くみられた。

献納銀額に応じて身分・格・下賜物などが給されたが、百姓身分で「脇差御免」となるには銀一〇〇目が必要であった。銀五〇〇目では「苗字・刀御免」、一貫目以上では「郡中村横目格」となった。上級身分・格の獲得は高額となり、「苗字御免・庄屋格」から「郷土格」二貫五〇〇目、「郷土格」から「郷土」一貫目、「一貫四〇〇目」、「郷土」から「郡方支配郷土」は二貫六〇〇目から五貫五〇〇目が目安であった。

献納者の経済活動については今後の課題であるが、銀二一貫目

を献納した後藤忠蔵は、宮崎郡の年貢米を延岡・大坂へ廻漕する廻船問屋であり、日高清次郎も同業であった。安政六年十二月、宮崎郡では銭手形三〇〇〇両分が発行されているが、後藤たち宮崎郡有力商人一〇人が両替方掛合となっている^③。彼らは「組外役人列」郷土として藩御用を勤めながら、一方で宮崎郡の経済的ヘゲモニー主体として君臨したのである。

献納銀によって家格上昇が可能になるという環境は、同一身分集団内での「身上り」願望を煽り、集団内対立を激化させる可能性を持っていた^④。近世期に献納銀によって「身上」った者たちは、維新以後「身上り」を否定されていきながら、集団内でどのような関係を築いていたのか。また身分制度が廃された維新以後の近代社会とは、彼らにとってどのような時代だったのか。今後の課題としたい。

註

- (1) 小野武夫『郷土制度の研究』（大岡山書店 一九二五年）。
- (2) 岡光男「郷土制に関する諸問題」（吉川秀造編『近畿郷土村落の研究』同志社大学人文科学研究書 一九六四年）、瀬谷義彦『水戸藩郷土の研究』（筑波書林 二〇〇六年）など。
- (3) 志村洋「藩領国下の地域社会」（渡辺尚志編『新しい近世史4 村落の変容と地域社会』新人物往来社 一九九六

- 年)、同「大庄屋の身分格式」(白川部達夫・山本英二編『江戸』の人と身分2村の身分と由緒)吉川弘文館二〇一〇年)、三澤純「幕末維新期熊本藩の地方役人と郷土」(平川新・谷山正道編『近世地域史フォーラム3地域社会とリーダーたち』吉川弘文館二〇〇六年)、今村直樹「十九世紀熊本藩の惣庄屋制と地域社会」(志村洋・吉田伸之編『近世の地域と中間権力』山川出版社二〇一一年)など。
- (4) 尾脇秀和「近世の帯刀と身分・職分」(『日本歴史』七九八号二〇一四年)、同「郷土帯刀」と「郷土株」―山城国王生村郷土と郷土前川家の創出―(『地方史研究』三七八号二〇一五年)。
- (5) 萬代悠「岸和田藩政と七人庄屋の家格変動」(『史学雑誌』一二四―八号二〇一五年)。
- (6) 明治二年「竈数石高人別調帳」(内藤家文書 第一部 二三年頁六六七)。
- (7) 「国乗遺聞」卷之四封国第九(『宮崎県史 史料編近世1』三六三―三六四頁)。
- (8) 「右同」三六六頁。
- (9) 「右同」三七三―三七四頁。
- (10) 「右同」四二九頁。
- (11) 「右同」三六八頁。「藤原有馬世譜」(『宮崎県史 史料編近世1』四八一頁)によれば、諸士一四六八・歩行士四四八・足輕一八八・御長柄者七人・御旗組五人・御馬中間七人・御草履取三人・大工二人・御焼物師一人・御船手一六八・御細工人二三人に暇が下されたとある。
- (12) 延享四年八月「日向国臼杵郡宮崎郡豊後国大分郡国東郡速水郡之内郷村高帳」(『宮崎県史 史料編近世2』)。
- (13) 延享四年八月「演説覚書」(『宮崎県史 史料編近世2』一六三―一六四頁)。
- (14) 「宮崎役所万覚」(『宮崎県史 史料編近世2』八一〇頁)。
- (15) 「右同」八三六頁。
- (16) 「右同」八四六頁。
- (17) 宝暦九年九月廿五日「萬覚書」。
- (18) 「寛延四年 宮崎郡長峯村百姓薩州御領日州穆佐江立退候一件」(『宮崎県史 史料編近世2』八六三頁)。
- (19) 拙稿「日向延岡藩領宮崎郡における村役人と地域社会」(『宮崎公立大学人文学部紀要』第17巻第1号二〇一〇年)参照)。
- (20) (21) 寛延四年閏六月廿九日条「萬覚書」。
- (22) 寛延四年八月五日「萬覚書」。
- (23) 宝暦四年八月廿一日「萬覚書」。
- (24) 宝暦十二年八月七日「萬覚書」。
- (25) 寛政元年十一月十八日「萬覚書」。
- (26) 文化元年八月十二日「萬覚書」。
- (27) 文化二年七月五日「萬覚書」。
- (28) 文化四年六月朔日「萬覚書」。
- (29) 文政十二年九月四日「萬覚書」。

- (30) 文政十二年十月十一日「萬覚書」。
- (31) (32) 天保二年五月朔日「萬覚書」。
- (33) 宝暦四年八月廿四日「萬覚書」。
- (34) 文化二年閏八月朔日「萬覚書」。
- (35) 天保二年五月朔日「萬覚書」。
- (36) 拙稿「近世山村における年貢と銀流通」〔宮崎県史研究』第3号 宮崎県 一九八九年〕七六頁。
- (37) 文化二年閏八月六日「萬覚書」。
- (38) 安政三辰年「諸品控日記帳」（渡辺邦夫氏所蔵文書）。
- (39) (41) 明治三十一年「旧延岡藩士族家禄証明願並同減禄ノ儀証明願」（内藤家文書 第二部一一家中二三一）。
- (40) 文化十四年十二月十六日「萬覚書」。
- (42) (45) 拙稿「幕末譜代藩の財政政策―日向延岡藩安政改革の藩債整理を中心に―」（『九州史学』第九十二号 一九八八年）。
- (43) (渡辺隆喜「幕末期延岡藩の財政政策と通貨政策」（明治大学内藤家文書研究会『譜代藩の研究』八木書店 一九七二年）五六六頁。
- (44) 「右同」五六七頁。
- (46) 「御改革覚書」（『宮崎県史 史料編近世2』所収）六五七頁。
- (47) 前掲拙稿（42）一四～一五頁。
- (48) 安政三辰年「諸品控日記帳」（渡辺邦夫氏所蔵文書）。
- (49) 安政四年九月十九日「萬覚書」。
- (50) (51) 安政二年十月二十七日「萬覚書」。
- (52) 安政三辰年「諸品控日記帳」（渡辺邦夫氏所蔵文書）。
- (53) 渡辺隆喜「幕末期延岡藩の財政改革と通貨政策」（明治大学内藤家文書研究会編『譜代藩の研究』八木書店 一九七二年）五九三～五九四頁。
- (54) 萬代悠「岸和田藩政と七人庄屋の家格変動」〔『史学雑誌』一二四―八二〇一五年〕六〇頁。